

SHOW-HOMEシネマフルーツ

★★★★★

落下の解剖学

2023年／フランス映画

配給：ギャガ／152分

2024（令和6）年2月23日鑑賞

TOHOシネマズ西宮OS

Data

2024-21

監督・脚本：ジュスティーヌ・トリエ
出演：ザンドラ・ヒュラー／ス완・アルロー／ミロ・マシャド・グラネール／アントワヌ・レナルツ

みどころ

中国では“第八世代”監督の台頭が顕著だが、フランスでも、1978年生まれの女性監督が躍進中らしい。同じ1978年生まれの主演女優もすごいから、第76回パルムドール賞の受賞は当然！アカデミー賞への期待も大きい。

もっとも、この邦題は一体ナニ？冒頭の、階段を転がり落ちるボールは一体何を意味しているの？そう思っていると、本作は参審制のフランスにおける「法廷モノ」だから。こりや必見！

密室殺人事件は推理小説の定番だが、それに近い設定の本作では、検視結果等の物的証拠の他は、被告人質問と11歳の一人息子の証言がポイントになるので、それを中心とした法廷ドラマの醍醐味をしっかり味わいたい。

ちなみに、結論は予想通りだが、黒澤明監督の名作『羅生門』（50年）的視点から、あなたの納得度は大きい・・・？

■□■パルムドール賞受賞作は超傑作！監督は？主演は？■□■

私が2001年に『実況中継 まちづくりの法と政策』（00年）で受賞した「石川賞」は「都市計画学会」の最高賞だが、カンヌ国際映画祭の最高賞はパルムドール賞だ。日本では、①衣笠貞之助監督の『地獄門』（53年）②黒澤明監督の『影武者』（80年）③今村昌平監督の『楳山節考』（83年）④今村昌平監督の『ウナギ』（97年）（『シネマ42』10頁）に続いて、2018年には是枝裕和監督の『万引き家族』（18年）が5度目の受賞している。そして、2023年のカンヌで審査委員長を務めた奇才・リューベン・オストルンド監督から「強烈な体験だった」と破格の称賛を受けて、パルムドール賞に輝いたのが本作だ。本作は、第96回アカデミー賞の作品賞、監督賞、主演女優賞、脚本賞、編集賞にもノミネートされ、第81回ゴールデン・グローブ賞の作品賞を含む4部門にもノミネートされ、脚本賞、非英語

作品賞を受賞しているからすごい。

本作の監督は1978年にフランスで生まれたジュスティヌ・トリエで、私が全く知らなかった女性監督。また主演俳優は、1978年にドイツで生まれたザンドラ・ヒュラー。こちらも私が全く知らなかった女優だ。他方、『落下の解剖学』という邦題は一体ナニ？原題の『Anatomie d'une chute』も英題『ANATOMY OF A FALL』も同じだが、解剖学と聞くと、誰でも映画よりも学术論文をイメージしてしまうだろう。たしかに本作には「人間の落下」に関するアカデミックな描写もある（？）が、本作は弁護士の私としては必見の「法廷モノ」だ。しかし、なぜ「法廷モノ」の本作にそんな邦題や原題が？それは、152分間じっくり鑑賞した後のお楽しみに。これは必見！

■□■夫婦と家族の会話はフランス語？ドイツ語？それとも？■□■

本作冒頭、人里離れた雪山に佇む一軒の山荘が映し出される。続いて、2階の階段の上からボールが落ち、それを愛犬スヌープが咥える風景が描かれる。これが本作のテーマである「転落死」を暗示することは、その後にわかるが、なぜここでそんな転落死が？

冒頭の、2階からボールが落下するシーンに続いてスクリーン上に登場するのは、ドイツ人の女流ベストセラー作家・サンドラが自宅で学生からインタビューを受けているシーン。すると、屋根裏部屋のリフォームをしていた夫のサミュエル（サミュエル・タイス）が大音響で音楽をかけ始めたからアレレ？これは一体ナニ？ひょっとして妻の取材への嫌がらせ？まさかまさか・・・？そう思うものの、そんな状況下で、やむを得ず、サンドラは取材を中止し、「また別の機会に」と学生を帰らせることに。

本作はジュスティヌ・トリエ監督作品だから当然フランス映画だが、サンドラはドイツ人だから、ザンドラ・ヒュラー演ずるベストセラー作家・サンドラのセリフはドイツ語？

夫のサミュエルはフランス人だから、夫婦の会話はフランス語？いやいや、実際の夫婦の会話は英語らしい。それは一体ナゼ？

■□■夫は自殺？それとも他殺？他殺なら犯人は？容疑者は？■□■

サミュエルの転落死を最初に発見したのは愛犬スヌープの散歩から戻ってきた息子のダニエル。視覚障害を有するとはいえ、山荘の近くの雪の上で頭から血を流して横たわっている父親に、スヌープと共に気づくことくらいはできるらしい。息子の叫び声でサンドラが、急ぎ夫のもとへ駆けつけると、すでに彼の息は止まっていた。検死の結果、死因は事故または第三者の殴打による頭部の外傷だと判明したが、これは自殺？他殺？そして他殺なら、犯人は？容疑者は？

それを判断するポイントの一つは頭部の外傷だが、これは転落した時の傷？それとも殴打による傷？また自殺だとするならその動機は？その兆候は？逆に殺人事件だとすれば、家族しかいない人里離れた山荘内での事件だから、その犯人はサンドラしかいない。しかし、そもそもサンドラに夫殺しの動機はあるの？本作は導入部でそんな推理小説の王道通りの問題提起をした上、「法廷もの」の本筋に入っていくが、その進行役になるのは裁判長

と検察官（アントワーヌ・レナルツ）、そしてサンドラとかつて交流のあった弁護士のヴァンサン（スワン・アルロー）だ。

■口■フランスは参審制だが、被告人質問の風景にビックリ！■口■

米国は陪審制、フランスやドイツなどヨーロッパは参審制。その両者を比較検討した上で、日本では2009年から裁判員制度が採用されたから、本作はその制度比較に格好の教科書になる。そう思っていると、案の定、裁判官の訴訟の積極性が目立つので、まずはそれに注目。

他方、私がアレレ？と思ったのは、日本では被告人質問の時しか被告人への質問ができる上、被告人には「黙秘権」という重要な権利が保障されている。それにかかわらず、本作では検察官から、そして裁判官から被告人への質問が随時になされていることだ。本件で被告人になっているのは、インタビューの受け答えにも慣れている著名なベストセラー作家、サンドラだから、検察官や裁判官からの論理的で鋭い質問に対しても、それなりに回答したり、切り返したりすることができている。しかし、サンドラほど頭が切れず、弁も立たない被告人なら、検察官や裁判官からこんなに鋭い質問をぶつけられれば、それだけでやり込まれてしまい、参審員たちに不利な状況を作り出してしまうはずだ。その点どうなっているのか、私には最後までわからなかつたが、逆に映画としてはその論争がかなり面白いので、それに注目！

■口■夫婦喧嘩のドタバタ劇がリアルに再現。こりや決定的？■口■

いきなり殺人事件の容疑者とされ、裁判の被告人にされてしまった場合、自分にとってベストの弁護人を選任するという最初のハードルはかなり高いのが現実だ。しかし、サンドラの場合はたまたまヴァンサンがいたからよかったが、この二人の関係（仲？）はともかく、殺人事件において被告人と弁護人ととの間で、何よりも大切なことは、被告人が隠し事をせず、すべて弁護人に話すことだ。弁護士の私は、その相互信頼がなければ殺人事件の弁護人など到底受任することができないことをよく知っている。

ところが、本件では、裁判が佳境に入ってくる段階で、死亡の直前に激しい夫婦喧嘩があったことが、夫のパソコンのUSBに録音されていたことが判明し、それが法廷で再現することになったからアレレ・・・？しかも、弁護人のヴァンサンはそれをサンドラから聞かされていなかったというから、さらにアレレ・・・？これでは被告人と弁護人との信頼関係が崩れてしまうのでは・・・？

普通、「夫婦喧嘩は犬も食わない」と言われているが、この法廷で再現されるサンドラとサミュエルとの激しい夫婦喧嘩のドタバタ劇は口論だけでなく、叩く音や物を投げつける音も交えた超リアルなものだから、こりや面白い！？そして、これを聞けば、サンドラが夫のサミュエルに対して殺意を抱いたのも当然。私ですらそう思ったのだから、参審員たちの心証形成は・・・？

■□■ 11歳の息子の証言能力は？その価値は？■□■

日本の「再審事件」としては、「松川事件」や「三鷹事件」等が有名だが、今なお再審請求が続いているのが「袴田事件」だ。その「袴田事件」の争点と同じように（？）、本作でもサミュエルの頭部の傷や解剖所見が客観的な証拠として重要だが、密室殺人事件に近い本件においては、視覚障害があるとはいえ、また、未だ11歳とはいえ、息子のダニエルがどんな証言をするかも大きなポイントになる。

もっとも、ダニエルはまだ11歳だから、証言に向けて母親でもある被告人のサンドラと綿密な打ち合わせをすれば、一方的に被告人に有利な証言をしてしまう恐れがある。そのため、裁判長はダニエル少年の証人尋問の前に、「母親との接触を禁止する」旨を宣言したが、そんなことが法的に可能なの？弁護士の私にはそれがよくわからないが、それはともかく、本作ではダニエルの一度目の証言はもとより、彼のたっての希望によって実現した二度目の証言に注目！この証言を聞いた上で、検察官の「論告」と弁護人の「弁論」を対比すれば、裁判の結論はある程度予測できるはずだ。

■□■ 無罪になっても真相はあくまで藪の中！ ■□■

黒澤明監督の『羅生門』（50年）は、芥川龍之介の小説『藪の中』を映画化したものだが、物事はそれを見る人物や視点によって、いかようにでも違ってくるものだということが如実に見えてくる、めちゃ面白い映画だった。今年4月に弁護士50周年を迎える私は、さまざまな裁判を通じて、それをいやというほど味わってきたが、その感覚は本作を鑑賞した後も同じだ。

長い審理を経て下されたサンドラの殺人事件の判決は無罪。サンドラと弁護人のヴァンサンがこれを喜んだのは当然だが、するとサミュエルは自殺だったの？それとも殺人の真犯人として誰か別にいるの？もちろん、その真相は藪の中だ。しばしば「裁判は真実を発見する場だ」と言われるが、それは完全に誤り。もちろん審理の中で真実が明らかになることもあるが、刑事裁判はあくまで被告人の有罪無罪の結論を下すだけで、必ずしも真相が明らかになるわけではないことはしっかりと理解しておく必要がある。しかして本作の判決を聞いた後のあなたの納得度は？

2024（令和6）年3月1日記